

賢治の初期童話とタゴール

——「めくらぶだうと虹」を中心に——

吉 江 久 弥

- 一、「めくらぶだうと虹」の内容について
- 二、恩田説批判からタゴールの言説に及ぶ
- 三、タゴールの講演「瞑想に就きて」
- 四、「家庭週報」の講演記事と作品「めくらぶだうと虹」
- 五、「家庭週報」に見る右作品以外の事項
- 六、改作「マリヴロンと少女」とタゴールの言説
- 七、右作品に見る恩田説から作品「龍と詩人」に及ぶ
- 八、改作の理由など

宮沢賢治の初期の作品の一つである「めくらぶだうと虹」は、何故かこれまでに殆ど研究の対象とされることがなかった。然し賢治専門の研究者であった恩田逸夫が言ったように、これは賢治の創作活動の根幹をなす中心思想を内容に持った重要な作品である。

ところで、恩田氏の論文は賢治の「まこと」説として定着し今日に至っているのであるが、哲学者やスパースの実存的人間観を抛り所とした為に、完全に的を射たものとはなり得ていないと思われる。その点、私は日本女子大学の校友会発行にかゝる当時の「家庭週報」に紹介されたタゴールの講演「瞑想に就きて」

——後に整理されて著書『人格論』に収録——の記事にこそ、この作品を十分に理解する鍵があると考え、また改作「マリヴロンと少女」の理解にも、タゴール著の『サーダナー（生の実現）』中の言説が欠くべからざるものであると考え、いづれにしても賢治にはタゴールの影響が濃いことを考察した。その上で又、この二つの作品と内容的に深く関連すると思われる賢治の作品「龍と詩人」に論及した。

はじめに

童話作品「めくらぶだうと虹」は賢治のごく初期の創作で、作の年月は大正十年秋かとも言われているが、実際は未詳である。

実はこの作品は作者によって抹殺されているものである。というのは、七校の草稿そのままの上に赤インクで大幅な手入れが施され、題名も「マリヴロンと少女」に変えられてしまっているのである。従って作品として存在しないということになるので、この為であろうか、それとも他の理由からであろうか、この作品は従来ほとんど研究家の取り上げるところとはなっていないのである。

それにも拘らず、「めくらぶだうと虹」は私の見るところでは、内容と思想とが渾然とした珠玉の作品である。私だけでなく、賢治研究家として知られていた故恩田逸夫氏もその思想面に着目して、この作品には「賢治のものの考え方の根底が提示されている」と述べている。その「宮沢賢治の文学における『まこと』の意義」という論文^(註)は氏の代表的なものとして高く評価されているのであるが、鋭くことの真実に迫った好論であることには今も変りがない。ただ私は、氏が考察の根底においたヤスパース（一八八三—一九六九）の実存哲学の考え方でなく、タゴール（一八

六一—一九四一）の言説を参考にすることによってその不備を補い、一層真実に迫ることが出来るのではないかと思う。この小論はその試みである。

（注）副題「めくらぶだうと虹」を中心として観た四次元芸術の解明」昭30・10・15『跡見学園紀要』第二初出。昭56・10・27『宮沢賢治論』(1)「人と芸術」所収。内容——「まことの内容」、「まことに至る方法」1「苦悩の徹底、実存への努力」、2「万人相通・自他不二」、三「自然観」、四「マリヴロンと少女への展開」、「結」。

一

先ず「めくらぶだうと虹」の内容をかいつまんで述べて置こう。

時は秋、城趾の真中の小藪の中にめくらぶどうの実が虹の様な色で熟れている。夕方近くの通り雨の後に出了た虹に、めくらぶどうがたまらなくなつて声を掛けた。冬が来て腐つて死んでしまう前に一度だけでも切ない思いを伝えたかったのである。その暗い表情を見た虹が優しくこれに応じて、宇宙の理法を丁寧に語つて聞かせる。めくらぶどうは終始熱心に耳を傾け、もつともつと教えてほしいと絶るように言うが、間もなく虹は消えてしまった。

このような筋で、ここでは省略するが、問答の部分を挟

む前後の自然描写の詩的で美しいことは正に絶品である。

さて、虹の語りの部分がこの作品の眼目なのであるが、それは大きく二つの部分に分かれる。一つはめくらぶどうの死の不安を言う言葉を受けて、万物が絶えず変容するという理法を、眼前の夕方から夜へかけての空の色の變化、丘や野原の形状の休まない變化などに託して語る部分（A）、一つはこれを導入部として語られる宇宙の絶対者と万物との關係、つまり後で触れる筈の「梵我一如」という、この作品のテーマに当る部分（B）、以上である。

（B）の部分での重要な言葉を次に抜き出しておこう。

けれども、もしも、まことのちからが、これらの中にあらはれるときは、すべてのおとろへるもの、しわむもの、さだめないもの、はかないもの、みなかぎりないのちです。わたくしでさへ、たゞ三秒ひらめくときも、半時空にかゝるときもいつもおんなじよろこびです。（イ）

すべて私に来て、私をかゞやかすものは、あなたをまきらめかします。（ロ）

すべてまことのひかりのなかに、いつしよにすむ人は、いつでもいつしよに行くのです。いつまでもほろびるといふことはありません。（ハ）

大まかに言えば、（A）（B）全体の趣旨は「色即是空」

（「般若心経」という、実体と物質的現象との相互關係をいう言葉で理解せられるものであろう。ことに「色」には「変壞」（絶えず變化して一瞬も常恒でないこと）、「質礙」（物質が同時に同じ処を占有できないこと）の二義があるというから、（A）の部分はこの「変壞」の意で十分理解が可能である。ところが（B）の部分になると、「色即是空」だけでは説明し切れないものがある。それは「まことのちから」、「まことのひかり」など具体的ないくつかの言葉が極めて重要な言葉として使用して語られているからである。

（注）岩波文庫『般若心経・金剛般若経』（中村元・紀野一義訳注 21ページ）

二

前の引用文（B）の（イ）（ロ）（ハ）を検すると、重要語は四つあり、それが相互に同様の内容を荷つていて、つまるところ次の様な關係になると思われる。

まことのちからⅡかぎりないのちⅡまことのひかりⅡいつもおんなじよろこび

一寸説明を加えると、（B）の部分の意味は、「まことのちから」Ⅱ「まことのひかり」が凡ゆる物質的現象（「わたくし」を含む）に発現するならば、凡ゆる物質的現象そ

のものがそのまま「かぎらないのち」に他ならず——このことを「梵我一如」という——、そのことが即ち「わたくし」にとつては「いつもおなじよろこび」であるということである。ここで注意したいのは、(イ)の中の「あらはれるときは」という表現で、この語の理解の如何によつて恩田氏と私の見解の相違が生ずるかと考えられる。

「まことのちから」とは勿論宇宙の絶対者、真理（梵）の力能、働きのことである。恩田氏が前掲の論文の中でたゞこの一語だけを取り上げて考察を進めていることは理解できるのであるが、それにしても次の様な説明には些か疑義を覚えずにはいられない。

・万物はいずれもこの永遠の生命力を輝かす可能性を持つており、「まことの力」を発揮するには、自己の人間存在の奥底に徹するところから生ずるものである。（一）「まことの内容」

・その一つの方法として、この力を「自然」の中に求め、（中略）さらにもう一つの方法として、苦悩に徹するところが考えられるが、（後略）（二）「まことに至る方法」

ここには実存的な考え方がはっきりと示されているのであるが、作品の本文にはこの様な深刻な要求はなされて居らず、また「自然」の中に「まことの力」を求めるというような朱子学や陽明学に言う格物致知に似た、「方法」を

匂わす表現もない。たゞあっさりと「これらの中にあらはれるときは」とあるだけである。恩田氏はまた、めくらぶどうの苦悩ということをも言っているが、めくらぶどうは死への不安をこそ持つていて、その為に「陰気」な表情なのである。

ここでタゴールの言説から一二の引用を試みよう。

・インドの精神は、インドの不変な靈感であつた、無限なもの現存を万物のなかに実感し肯定する実際の経験なのである。（『生の実現』^{（註）}一、美田稔訳）

・最高の魂は、わたしのうちにも息子のうちにも存在している。わたしが息子のうちに見出す歓びはこの真理の実感なのである。（同上書、二）

・人間は（中略）自分の人格の限界を超えているいつそう大きな自己への感覚をもっている。（同上書、三）

ここに見られる「無限なもの」は即ち「最高の魂」、「真理」、「いつそう大きな自己」ということであり、それは言うまでもなく「まことのちから」のことである。つまり、「まことのちから」と「万物」「息子」「わたくし」との間には間隔や距離があるのではなく、既にその中にあるものを「感覚」し「実感」しさえすればよいわけであつて、それは求めたり、そこに至つたりするものでないとタゴールは語っているのである。作品本文の「その中にあらはれ

る」とはこのことであつて、そこに「歎び」があると言つてゐることは、先の虹の言葉とも合致する。なお、この「歎び」の語を含む右の引用文は、息子を愛するのは、息子に心を引かれてのことでないという意味の『ウパニシャッド』の言葉を布衍したものである。

虹は既にこの真理を覚知した存在であつて、はかなく消えるものでありながら同時に「かぎりないのち」であることの「よろこび」の中にある。これに反して、めくらぶどは死の冬を迎えるのに「まだ二か月」もある若さであるにも拘らず不安である。これは何故かと言へば、その真理を覚知してゐないからなのである。手取り早く『ウパニシャッド』の一句を引用すれば、

肉体は、不死にして肉体なき自我の住家である。この肉体を自分と考へ、自分をこの肉体と考へてゐる時は、自我は苦樂に囚はれてゐる。

傍線を施した所は「絶対者」の事で、いわゆる「梵我一如」を覚知しない間は俗念の境から脱する事が出来ないという趣の文である。これはタゴールの言葉ではないが、タゴールと矛盾することはない。彼の言説は後に引用することになるであらう。

(注一) 『生の実現』は『Sadhana』の邦訳書。以下のこの書からの引用文は美田稔訳（アポロン社『タゴール著作集』4）による。

この書は八章から成り、一、二、三、はその所出の章順を示す。
(注二) 『ウパニシャッド』からの引用文は、大正四年七月無我山房出版の『優婆尼沙土』（二〇三ページの小型本）の赤沼智善訳による。この書は『ウパニシャッド』の本邦最初の訳本と思われる。なおタゴールは『生の実現』の序文で、「筆者はウパニシャッドの教典が日々の礼拝に用いられている家庭に育つた」と述べている。

三

恩田氏が考察の根拠としたヤスパースよりも、古代インドの哲学を継承し、詩人の魂を以てそれを現代に甦らせたタゴールの思想の方が作品「めくらぶだうと虹」に即していることを前項に述べた。私の目的は一応これで達したつもりであるが、それでは作者の賢治はどこからこのような考え方を得たのであらうか、という問いが生ずる。それは經典からであるという答が直ちに返つて来ると思われるのであるが、では彼の親しんだ經典から直ちに作の構想を得たのであらうか。例えば「正信偈」の冒頭の二句に不可思議光「無量寿如来」（まことのひかり）「かぎりないのち」の意）の語があるのだが、ここから直ちにあの発想が可能になつたのであらうか。私にはそうは思われず、やはりタゴールがその間に介在していると考えざるを得ない。だとすると、賢治は何によつてタゴールに接したのであらうか。

もちろん、賢治が『生の実現』を読んだとすることも一概に否定は出来ない。『生の実現』の原著『Sadhana』(サー・サダナ) (一九一三マクミラン社) の最初の邦訳本(三浦寛造訳、玄黄社)が出たのが大正四年二月、次が同年五月(中沢臨川訳、新潮社)で、この年賢治は十九歳。中学生時代から読んでいたとされる雑誌「中央公論」には翌大正五年のタゴール来朝以前からタゴールに関する記事が頻りに掲載されていたこともあって、詩聖であり哲人でもあるタゴールに関心がなかったとは全く考え難い。ことに当初知識階段におけるタゴール研究では英文詩集『ギータンジャリ』と『生の実現』とがその対象の筆頭であったから、時期の遅速は別として賢治がこの二書を手にとったであろうことは疑えないと思う。現に後にも述べるが、改作「マリヴロンと少女」には『生の実現』を抜きにしては理解し難い表現があるのである。

しかし「めくらぶだうと虹」には、より直接的な作者との結び付きを思わせる資料がある。それは同じ思想が集約的に、しかも先に見た四つのキーワードともいうべき言葉がその中に見られる週報紙であって、賢治が容易に手にすることが出来た筈のものである。妹トシの在学中の日本女子大学の同窓会である桜楓会発行の「家庭週報」(注3)がそれで、そこにはタゴールの講演「瞑想に就きて」の「抄訳」

が五回に渡って連載せられているのである。大見出しは「詩聖タゴール氏の講演」。サー・タゴールの名で掲載されている。

その講演について一寸説明を挟んでおくと、タゴールは初来朝の大正五年の七月二日に校長成瀬仁蔵の懇慫に応じて日本女子大学校に赴き、講堂でノーベル文学賞受賞の対象であった「ギータンジャリ」(英文) 中の一篇と、来日途中の船中での作であるベンガル語の短詩とを朗誦して学生に聞かせた。その後更に同校の軽井沢における夏季修養会に招かれ、六日間の滞在中、八月十八、十九、二十日の三日間、毎日夕刻五時から三泉寮の野外で行ったのが此の講演である。本人自身あとでこの時のことを回顧して、「軽井沢の生徒達は、私の心の中に秘められた寶石を探すのを助けて下さいました。」と語った(注4)というから、熱心な聴講態度が語り手の内奥から言葉を流露させたものと思われる。

この講演は、翌年出版の『Personality』(一九一七、マクミラン社) に収録せられた。この著書は後に邦訳「タゴールの人生論」(由良哲次訳、一九二三) が出、一般には「人格論」として知られるのであるが、その中の一章である「瞑想」に較べると「家庭週報」の記載文の方が長いものにも拘らず「抄訳」と断っているのであるから、学生たちの聴いた講演には色々と付加された説明があったものと思

われる。

この八月二十日に終った講演の訳が、早速九月一日から「家庭週報」紙上に金曜日毎に五回続けて紹介せられたのであるが、「週報」は、在学中のトシに購読されていたに違いないし——トシは軽井沢の夏季修養会に参加してはい——、トシの手から或る機会に兄賢治に渡ったであろうことも十分考え得ることだと思ふのである。

(注1) 「正信偈」にはなお「無量無辺光」「清淨歡喜」「智慧光」など、仏の光について種々の表現がなされているし、賢治が幼少時から「正信偈」を暗記するまでに読み習ったことが伝えられているけれども、これが直ちに作品の発想に繋がったとは考え難い。仏教以前の「ウパニシャッド」には絶対者の光について書かれたものが多いことは周知の通りである。

(注2) 「中央公論」大正四年五月号に八名の学者や作家等の寄稿による「タゴールの研究」のページがあり、各氏の文にそれが窺われるが、特にその中の三浦閑造がタゴール研究の為の書名を並記していることでそれが判る。なお「中央公論」大正四年八月号の「印度思想論」、同五年六月号の「ウパニシャッドと仏教」(何れも木村泰賢)は注目すべき論文である。

(注3) 第三八二号——第三八五号。なお創刊が明治三十七年六月二五日で、昭和二年四月一日第一六三三号で廃刊、以後「桜楓新報」と改題、現在もなお続刊されている。

(注4) 十四回卒業生和田富子(高良とみ)の「詩聖タゴールと軽井沢の思出」(「家庭週報」第七五二、七五三号)による。この文は、彼女が大正十三年にタゴールの来朝を長崎に迎え案内した折

に、タゴールの語ったことを記録したもの。タゴールは印度でもこの好印象を語っていたという。なお和田富子は軽井沢で学生としてこの講演を聴いた一人である。講演の訳者はこの人という説もあるようだが、男性の手による訳であるに違いないと思う。

四

「めくらぶだうと虹」に関連あるところをタゴールの講演記事の中に見ようと思う。

「瞑想に就きて」という題名の故か、一般にはこの講演は「瞑想を指導した」という風に伝えられているのであるが、表向きはそうであつても、肝心なのはそれによつて「梵我一如」の精神を教えたということである。それは又「めくらぶだうと虹」で虹が教えたことでもあるから、先ず端的にこの事を語る部分を「家庭週報」から幾つか引用する。講演は三日間に渡っているので、その第一日目のを(一)、二日目のを(二)という風に示す。又、原文を読み易くする為に適宜送り仮名や句読点を付ける等の変更を加える。

講演は開口一番「梵我一如」に切り込んで次の如く述べた上で、それが富や知識の様に外から取り込むものではないと説明する。

メディテーションといふ語は、心意を何か或る真理の中心に置くといふ意である。(中略)即ち其の真理

が吾人を自己の有となす、即ち吾人自らは其の真理の支配を受けるに至るものである。(一)

吾人の意識は全く其等の真理を吸収すれば即ち、吾人自ら真理の中に在るのである。この秘義は吾人が直接して覚知し得るのである。(一)

此の真理は何処にも在る。然し我れ等の意識は未だ覚醒されず、此の真理を充分に体现しない。我等は神の此の偉大なる真理に依つて覚醒し自覚し、充分にこれを成就しなければならぬ。(三)
そして、

あらゆる真理の中心には一つの無限の大人格が存在せねばならぬのである。(二)

とし、「無限の大人格」は又「至上無限の我れ」「無限の實在」「あらゆるものゝ属するその我れ」(二)とも言い換えられているのを見る。賢治の有名な「農民芸術概論綱要」に、

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに依じて行くことである

という序論の一行があるが、傍線を施した部分が正しく以上の如き精神であることは、これを以て明らかであろう。なお、右の「正しく強く生きる」ということについては、講演記事の次の文がこの趣意に該当すると思われる。

吾人が真実にして吾人の精神が宇内無窮の真理と真正の關係を有してゐる場合には、吾人の言語坐作進退はすべて真実に、宜しきに適ふものである。(一)

めくらぶどうの死に対する不安が、このことが覚知されていないからであろうことは先にも言つた通りであるが、これについては次の如き文がある。

吾々の不完全、不幸、あらゆる罪の源は、此の真理が感得されず実現されない為である。(二)

若し我れ等が此の世界(注、俗界)のものであつて、斯の如き自己中心の生き物であると感ずるならば、それは即ち死である。(三)

死は我が魂が神と共なる処に於て眞の自由があるといふ事を意識しないから存するのである。(三)

祈りや瞑想はこの境から脱せんとして行なわれるのであるが、その際に最も大きな障害となるのは「自己中心の願ひやあらゆる執着」(三)、「利己的なる生活」(三)であるから、これを破棄し給へと祈るのだとタゴールはいうのである。

次に「あらゆる真理の中心に存在する絶対無限の大人格」の別称である「まことのちから」以下の四つの言葉について見ることにしたい。

1 「まことのちから」——「力」

この用例は「週報」(一)、つまり第一日目の講演に集中的に見られる。たゞし他の語と同様に表現を様々に変えており、「まこと」という表現は「誠の父」(二)という一例だけである。この「父」とはもちろん神、絶対者の謂である。

○神は吾人の世界を創造する。しかも其の無限の創造力を以て始終絶え間なく刻々に創造せられている。(一)

○神の力能は意識となつて発現し、吾人の裡に、又吾人が周囲の世界の裡にも流れ亘る。吾が外にあつては「世界」となり、吾が内にあつては「吾が意識」となるものは等しく同じ力である。(一)

○此の点を瞑想する時は、人の心に、神、活ける力の流となつて表はるる偉大なる創造力を想はしめ、又自身が此の生命の力に関係を有すること、又吾が意識は全世界が絶大の存在者において全く吾れと一なるを覺知し得たる時に完全なものとなる、と言ふことを覺らしめる。(一)

傍線したように色々の表現がなされているが、凡て「まことの父」の「ちから」に他ならない。正に「頌讚すべき其の能力」(一)である。

2 「かぎりないのち」——「生命」

○真の生命は神の限りなき懷に在る。(三)

○神は父なるが故に祈る事を得るのである。そして真の生命は我が父に在るが故に、此の祈りは真のものである。(三)

○此の打撃や苦痛から(注、によって)、真理は此の小さい生命からでなく、聖の大なる生命から来るといふ事を覺了するのである。(三)

これは大なる生命を十分に意識し悟了しようとする時の祈りである。(三)

3 「まことのひかり」——「光」

○あゝ吾が父よ、汝は何処にも限りなく在^{おほ}し給ふ誠の父である。吾々をして此の大なる光に醒めて、汝吾が父なりといふ此の真理を意識せしめ給へ。(二)

「誠の父」の「大なる光」は即ち「まことのひかり」に他ならない。

4 「よろこび」——「歡喜」

○此の真理を覺る時は吾等は自由に、真実になり、凡ての存在と調和し、随つて大なる歡喜を味はふことを得る。(一)

○此の自由は歓喜である。しかも無限窮の歓喜である。

(中略) 吾人は真実に大君(注、絶対者)の創造物と共に歓喜を味はふものである。(中略) 吾等の心が自ら歓喜の絶頂に達する時は、吾等の態度をして真に単純に、自然ならしめ、自由の氣に充ち溢れしめるのである。(一)

○次は南無と祈る。こは即ち真に我れを捨つる事を得しめ給へといふ意味である。そしてこは人の愛の最も高き悦びである。(二)

○神における生命については一点の疑ひも持たない時に自由を感じるのである。そして凡てのものは悦びを齎して来り、我れ等は自卑(注、謙遜の意、喜びの心を以てこれを受ける事が出来、且つ感恩し叩頭して受ける。我れは生命の悦びが来る処の汝を拝す。朝日や夕日や、又は凡ての人の關係―あらゆる喜びの流れが種々の關係を通して四方へ走った―を迎ふるものである。(三)

○悦びと自由とは二つながら彼に在る。(三)

「歓喜」「悦び」「喜び」など、様々の表現が見られるが、凡て「かぎりないよろこび」であり、従つて「いつもおんなじよろこび」であることがこれで判る筈である。

なお、タゴールの詩人的情熱が濃厚に表われている『生

の実現』の中に、「よろこび」を語る叙述が頻繁に見られることを付け加えておく。

五

前項に関連して、ここに付け加えておきたいことがある。

1

自己中心の考え方を破棄し、真理に覚醒した時に我々は「無私の愛」(三)を体得する、ともタゴールは言う。「神の力能」が「吾人の裡に、又吾人が周囲の世界の裡にも」(一)等しく存在するのであるから、即ち「すべて私に来て、私をかがやかすものは、あなたをもきらめかします」ということになるのであるから、神の愛は私の神への愛であり、私と周囲の一切との間にも同様の愛が実現せられる。それが凡てのものは皆兄弟ということでもある。それについては、大正十二年頃のものと言われる賢治の〔手紙 四〕の中に、

どんなこどもでも、また、はたけではたらいてゐるひとでも、汽車の中で苹果(りんご)をたべてゐるひとでも、また歌ふ鳥や歌はない鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、みんな、むか

しからのおたがひのきやうだいなのだから。

という思想が見え、同じ頃かと思われる「銀河鉄道の夜」初期形の終りの方にも同様趣旨の表現があるのも、全くこのことである。

それに関連してここで引用したいのは「万のものが皆兄弟」という明確な表現を持った「家庭週報」掲載の英人宣教師アンドリュースの談話（訳者不詳）中の次の言葉である。賢治はそれを目にしたのかもしれない。

神が大地と空間と星とを造り給ひ、又自分自身の精神力を与へ給ふたといふ意識を、深い瞑想に入つて悟得するならば、万のものが皆兄弟であるといふ信念、宗教の帰一を意識する事は出来ねばならぬ筈であります。かゝる信念涵養に最も妨害となるものは、前も申上げた事の「偏狭なる自己」の障壁であります。（「家庭週報」第三八三号、大5・9・15、「万物皆兄弟」）

アンドリュースは当時印度からタゴールに随行して来た人で、タゴールが心から信頼していた人である。軽井沢では、タゴールが夕方から講演する一方で「タゴール詩聖と印度」と題する談話を幾朝か学生たちの前で行ない、それが「週報」には第三八〇号から四回に渡って掲載されている。熱心なキリスト教徒でありながらタゴールの思想を十分に理解していたことは、右の文でもよく判る。なお彼に

は次の様な言葉もある。

優婆尼沙土^{ウパニシト}では「凡てのものゝ内に我を見出して、我が内に凡ての存在を見出す」といひ、クリストは同じ事を「汝のごとく汝の隣を愛せ」と云はれました。

（同第三八四号）

2

賢治はよく「修羅」という語を用いたが、この語については色々の解釈がなされているようである。それについて思うに、タゴールの言う、自己中心の考えから脱却し切れない状態が即ち彼の言う「修羅」なのではなからうか。講演「瞑想に就きて」の中に次の様な言葉がある。

吾は無限の我れに係れる故に、其の態度は決して高慢にも自己満足にもならず、唯自己否定である。吾人は此の境に至らぬが故に傲然と歩き廻り、或は悪をなす、詐^{いかり}をを語るのである。（二）

傍線した如き境涯から脱しようとするところに賢治の悩みや焦りがあつたのではなからうか。詩集『春と修羅』の「春」は、従つてそこから脱却した境地ということになるのだが。

まことのことはここになく
修羅のなみだはつちにふる

(詩「春と修羅」の一句)
と、「まこと」と「修羅」とを対置させていることも参
考になる。

3

「家庭週報」の例の講演の中に次のような部分がある。

吾人は其の出生地がベンゴール州とか日本の一部と
かいふことから、自然、世界の一部にのみ属するもの
といふ觀念が起り易い。^{しかるが}乍然吾人は真の意味で考へる
と、無限の裡に生れるのである。個々の出生地は絶え
ず變化する。けれども、自身が全世界の所属であると
いふ事實は不易の真理である。(一)

右の「無限」とか「全世界」とかいうのは「宇宙」の意
味であろう。このような考え方からすると、岩手県とか花
巻とかの特定の呼称を固執することは否定される。「イー
ハトヴ」というエスペラント風の呼称の発想もそこから生
まれたのではなからうか。

イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を
求むるならばそれは、大小クラウスたちの耕してゐた、
野原や、少女アリスが辿った鏡の国と同じ世界の中、
テバインタール砂漠の遙かな北東、^{○○○○○}イヴン王国の遠い
東と考へられる。／＼実にこれは著者の心象中に、この

様な状景をもつて実在したドリームランドとしての日
本岩手県である。(以下略) (『注文の多い料理店』新
刊案内)

特定地点であることを避け、「著者の心象中に……実在
した」云々と断つているところから一層そのように考えら
れるのである。いくつかの外国の童話中の場所が挙げられ
ている中に、タゴールの詩集『新月』の中に見えている
「テバインタール砂漠」という架空の地名も出て来ている。
イーハトヴについては「無何有の郷」から思い付いたとす
る説もあるようだが、右のように考えると大した根拠はな
さそうである。

なお、先の引用文の部分は「家庭週報」にはあつて、
『人格論 (Personality)』に収載せられた「瞑想」の中
にはない。右に私の述べた推測が間違つていないとすれば、
このことも賢治が「家庭週報」を見ていたことの証拠の一
つということになる。

タゴールの講演を直接聴き、又はその記事を読んで感動
した人は多い筈であるが、その証跡を残したと思われるの
は賢治ひとりである。その創作力は勿論ながら、生来の詩
人的な直観と宗教的素養とが、タゴールのメッセージを受
ける優れたアンテナとなつたことがそれを可能にしたので

あろう。「めくらぶだうと虹」にとゞまらず、タゴールの影響がその他の賢治の色々の考え方に及んでいたことが以上の考察で明らかであると思う。

「めくらぶだうと虹」とタゴールについての考察は以上で終えるが、ついで改作の考察に移ることにしたい。

六

「めくらぶだうと虹」の手入れによる改作「マリヴロンと少女」は、登場人物が題名に見るように変えられ、しかも現実的な状況の作品になっている。マリヴロンは後に述べる通り、実在したオペラ歌手マリヴランをモデルとしており、少女ギルダには恩田氏の言う通り賢治自身が投影されていると思われる。テーマの上にも大きな変更があるが、それでも「めくらぶだうと虹」の「中で虹の語った言葉、冒頭の項(一)の(イ)(ロ)の中の(ロ)はそのまま残されていて、変えられたのは(イ)の部分である。ここに改作の主要な理由が見られるのであるが、それは次の様な文に変えられている。そこは勿論虹に代ってマリヴロンがめくらぶだうならぬ少女ギルダに教える言葉である。

正しく清くはたらくひとはひとつの大きな芸術を時間(Ｂ)のうしろにつくるのです。ごらんさない。向ふの青

いそのなかを一羽の鵠がとんで行きます。鳥はうしろにみなそのあとをもつのです。みんなはそれを見ないでせうが、わたくしはそれを見るのです。おんなじやうにわたくしどもはみなそのあとにひとつの世界をつくつて来ます。それがあらゆる人々のいちばん高い芸術です。

いくつかの箇所に傍線を施したが、まず(A)については前々項(四)で引いた「農民芸術概論綱要」序論の「正しく強く生きる」と同意であり、これを含むその一行全体の趣旨が右の引用文の趣旨と重なるものであることが当然予測せられる。ひいてはこれが先に述べた「梵我一如」の思想を受けたものであることも理解できる筈で、(ロ)の部分が残された所以もそこにあると考えられる。

引用文は眼前を飛ぶ鵠を譬喩としている。全生命を懸けた一打一打の羽搏きを続けることで鵠が目的の場所へ行くのだけれども、人々が普通に見得るのはその羽搏きの瞬間だけの姿であろう。そのように、人々の働きや凡ての行為はその時その時のものと思われるであろうが、そうではなく、その目的へ向かう連続に一つの大きな価値を見るべき(B)(C)(D)(E)で、その行為が宇宙意識を体現して「正しく清い」ものである時、それは「ひとつの大きな芸術」たり得るのだ(B)、しかも各人にとつての最高の芸術とはそ

れ以外にはあり得ないのだ(四)、と結論したのがこの部分の意味だと私は考えるのである。

恩田氏の理解は私のそれとは些か違う。氏の説明の要所を引用すると、

われわれの行為もまた、「まこと」を体感したものであれば、それはその場かぎりの雑多な現象ではなく、「過去を背負い過去に限定されつつ、しかも過去にない新たなものが形成されてゆく歴史的存在として意義を有する」ものとなる。(前掲論文の四「マリヴロンと少女」への展開)

つまり、その時その時の行為を「雑多な現象」であるとし、それが「まこと」を体感したものである限り、次々に新しい価値を生んで行くものとしての意義を持つことになる、というのであって、一つ一つの行為とその連続に、意義を認めていないのである。恩田氏は又、マリヴロンの言葉の趣旨を「働くことこそ、一つの偉大な芸術であるという考え方」だ、とも述べているのであるが、この表現も唐突であり、右の説明とどう関連するのかが明らかでない。

もつとも恩田氏はこの作品を「何か特定な創作意図のもとに執筆されたことが推定される」と言っている。つまり改作以前のものととの内的連関についての考察がまだ十分でないことを自ら表明しているわけである。

改作の意図については別に考えることとして、この作品自体の創作意図は先に述べたことだけでも明らかであると思うが、タゴールの言説を引合いに出すことで、それは一層明らかになるであろう。尤も私自身最初は難解であったのであった。ただしここでは「家庭週報」の講演記事の中に直接見合うものがないので、主として『生の実現』から引く。賢治がこの著書に接した可能性があることは先に言った通りである。引用したい箇所は多いが、その悉くを挙げることは控える。

先ず一つ一つの仕事は雑多なものでなく、尊いものであるということの用例。

○人間の生命が魂のなかに自分の根元的な一を見出すとき、(中略)愛にあふれる。各瞬間に永遠なものからのことづてがもたらされ(る)、『生の実現』(二)

○自我の個性はたえず個有の生命を活気づけるために、普遍的なものなかにたびたび没入しなければならぬ。各瞬間、そのなかをじつさいに通りぬけねばならない。一步ごとに永遠なリズムに従い、根本的な一致に触れ、このようにして美と力において均衡のとれた分離(永遠者と自分自身とのあいだの)を保たねばならないのである。(一四)

これと同趣旨の文は、他の著作にも見られる。その例、

○（人間の魂と「無限なる魂」とが深く交わるという精神的調和は、）われわれの生活の過ぎ去る瞬間における「永遠なるもの」の持続的な力である。（嵯原徳夫訳『創造力ユニティ（Creative Unity）』「東洋の一大学」、一九二二。）

更に、マリヴロンが鶴を比喻にしているように、比喻が用いられた例は次の通りである。

○未完成なものの中に完成のすがたを啓示する、この音楽の一節一節のなかに、完全なものがある。その一つ一つの音調が最終のものではないが、それぞれの音調は無限なものを反映している。（『生の実現』七）

音楽はタゴールの得手とするところで、度々譬喩としても用いられているが、これと似た用例が『人格論』の中にも見出される。

○本を一章一章に従って読んでいくと本は動くけれども、全体として本を知った時、すべての章が内的関連を持ち、本が静止しているのが解る。（二、吾妻和男訳）

次に「仕事」ということばを含む用例。

○すべての仕事がブラフマン（注、梵の意）と結合するための道となるときに歓喜がみちあふれる。（『生の実

現（六）

○詩人の歓びは詩のなかに、芸術家の歓びは芸術のなかに、勇敢な人の歓びは彼の勇気を示す行為のなかにあり、また賢者の歓びは真理の認識のなかにある。（中略）またブラフマンを知る人の歓びも、毎日の小さな仕事、大きな仕事、すべての仕事において、真理や、美や、秩序正しさや慈善において、それぞれの行為において無限なものを表現しようとしてゐる。（八）

六）

マリヴロン女史の言う「最高の芸術」とは、もちろん通常の芸術の意味ではない。又、単に「働くこと」が即ち芸術であると言っているのでもない。「まことのちから」即ち絶対者、無限なるものの力を覚知して、それが顕現する一切の行為や働が「あらゆる人々のいけばん高い芸術」であると言っているのである。右のようにタゴールを参考にするることによって一層はつきりと理解できるこのことは、作者賢治がタゴールの影響を受けたことを確信させるものではなからうか。タゴールはまた、次のようにも言っている。

人間の最高の表現は人間のうちに示される神自身の啓示である（八二）

われわれは「美は真理であり、真理は美である」ということをつねに知っていなければならない。(17七) 以上のことに関連して、なお二つのことを付言しておきたい。

賢治に次のような文がある。

すべてうつくしいといふことは善逝^{スガタ}に至り善逝からだけ来ます。善逝に叶ひ善逝に至るについて美しさは起るのです(童話「ひのきとひなげし」初期形)

梵語^{スガタ}は、如来・正偏知などと共に仏の十号の「こと」と説明しているが、右の文脈からは「人」でなく、それ以上の絶対者、無限なるものと解すべきであると思われる。これを体感するところに「よろこび」が生れることは先にも述べた通りであるが、『生の実現』の次の文は、右の賢治の文と内容を同じくし、表現も酷似している。

予言者は言った。「飲びからすべてのものは生まれ、すべてのものは飲びによつて養われ、飲びにむかつてすべてのものはすすむ。飲びのうちにすべてのものは入っていく。」(五)

「予言者」の言とは、『ウパニシャッド』の中の言葉であると思う。賢治の文の「うつくしいといふこと」は、童話作品では美貌に即して言われてはいるが、作者の真意は

そのような限定したものでなく、それを包含しつつもマリヴロンの言う「最高の芸術」そのものを指しているのであろう。

次に賢治の詩「産業組合青年会」(一九二四・一〇・五、未刊「春と修羅・第二集」)の中に、

まことの道は／誰が云つたの行つたの／さういふ風のものでない

という詩句がある。「まことの道」の絶対であることを憤然とした口調で言つたものだが、この詩のいくつかある草稿の一つに、

正しく強く生きるといふことは／みんなが銀河の全体を／(ひとつのこゝろにもつことだ)(この最後を更に(めいめいとして感ずることだ)と変える)

と手直しを試みているものがある。短い詩の創作過程にこのような表現が見られるわけであるが、これで見ると、「まことの道」が右の傍線部を内容としたものであることが推測できると同時に、右の引用文の全体が、

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに应じて行くことである(「農民芸術概論綱要」序論、一九二六)

と同趣旨であることが知られる。マリヴロン女史の言葉の趣旨がこれと全く同じであるということは色々のことを

思わせるが、改作への手入れが行われた大体の時期を示唆するもののように思われることも、その一つである。

(注1) 原稿の上部余白の箇所に書かれ、矢印で抹消した本文へ導入している(校本全集第三巻「校異」)。

(注2) 「序論」には、この他「求道すでに道である」という句もあるが、「生の実現」一には、趣旨を同じくする「道はすでに目的地への到着のはじまりである」という文章がある。この他にも同趣の語があつて、この「綱要」全体の発想もまたタゴールと深く係わっているように思われる。

七

これまでに言い残したことを、最後に一二述べておく。

恩田氏は前掲の論文の中で、

「まこと」ということが広大な時空を包含超越した「四次元」の世界であり、永遠なる時間としての「第四次元」感覚であるとすれば、云々

と述べているが、賢治のいう「第四次元」とは、恩田氏のいう「まこと」を覚知した次元こそがそれであつて、「まこと」が即ち第四次元感覚であるということではないと思う。また、

彼(注、賢治)は自然のみを尊重したのではなく、彼が本当に希求したのは、自然及び人事のすべてを統一している原理「まこと」であつたのである。

と述べているが、自然と「まこと」とをこのように分離させて考えるのは当たらない。「(賢治が)自然によって生命力の根源に至る契機をつかもうとした」とか、「めくらぶだうと虹」に賢治の「自然観の萌芽」が見られるとか述べているのも、右のような誤った分離観によるものである。たゞし「万人相通・自他不二」を賢治に見ているのは、「実存的交流」という点を抜きにすれば流石と思われる。

ところで恩田氏は、右にいう賢治の「自然観」を最も明瞭に語るものとして「龍と詩人」を引合いに出しているのであるが、この作品(初稿の日付「二〇・八・二〇」)について些か私見を述べておきたい。

「龍と詩人」の登場人物は「マリヴロンと少女」ならぬ「アルタとスールダッタ」である。老龍チャーナタは、絶対無限なるものの代弁者であると私は見る。「詩賦の競ひの会」でスールダッタが「いちばん偉い詩人」のアルタを降したが、老龍が詩というものの本源を論ずというのが此の作品の設定である。

作品の中で、敗れた詩人アルタが勝者スールダッタに遺した頌詩に、

あしたの世界に叶ふべきまことと美との模型をつくりやがては世界をこれにかなはしむる豫言者、設計者

スールダッタ

という句がある。若い新人を「予言者」と称えているのであるが、この詩句は「マリヴロンと少女」で、少女がマリヴロンを称えて

先生はこの世界やみんなをもつときれいに立派になさるお方でございます。

と言った言葉と趣旨を同じくするものと考えられる。恩田氏はスールダッタを賢治の「分身」と考える一方で、「マリヴロン」芸術、少女「賢治」とも述べているのであるが、賢治をこのように仮託したということには私も同意したい。ところで、その上で考えると、作品の中でスールダッタが「予言者」として称えられていることに奇異の感を抱かざるを得ないのである。作品には彼が予言者であることの実は示されていないし、当時の詩人で予言者と称される程の人物は、実在の詩人タゴール以外にいなかったからである。勿論ここでの予言者とは新しいビジョンを示す者を言う。

そこで考えるに、この頌詩はタゴールにこそ相応しいのではなからうか。その中には「まことと美との模型をつくり」という言葉もあるし、右に引かなかったが、

風がうたひ雲が応じ波が鳴らすそのうたをたゞちにうたふスールダッタ

という詩句もあるのである。従つて老詩人アルタとスールダッタとは、本質的には逆転させて考うべきではなからうかということである。更に思うに、賢治は詩人としての将来の自分をタゴールをも凌駕するものと思ひ描いた、その作品が「龍と詩人」ではなかつたらうか。アルタにはドイツ語では祭壇 (Altar) の意があるが、老人・長上 (alt) の意を含ませたものと見られる一方、スールダッタには釈迦の幼名 Siddhartha を利かせていると考えることもできよう。老龍が、

誰が許して誰が許されるのであらう。われらがひとしく風でまた雲で水であるといふのに。

という時、その「われら」とは、老龍自らは勿論として、アルタもスールダッタも詩人として等しく根源的なあの「まことのちから」「まことのひかり」の具現者であり、そこから歌う者であるということを言っているのだと思うつまり、賢治は自らの才能を強く信じ、将来の自分の地位をこういう形で宣言していると考えるのである。

なお、恩田氏がマリヴロン「芸術と考えた理由は判らぬでもないが、やはり無理で、私が「龍と詩人」のアルタをタゴールと考えるように、「マリヴロンと少女」でもマリヴロン「タゴールと考えた方が自然ではなからうか。そう見ることに」

思いが素直に出ていることになると思われる。しかもタゴールも賢治も音楽好きでこのことで共通している。

(注1) 一例——来朝前後、タゴールは日本では詩聖・聖者・哲人などと呼ばれた。外国の例を挙げると、一九二一、スウェーデンのアカデミーで記念講演をした際、ウパサラの大神教が、「ノーベル文学賞は、芸術家と予言者を兼ね備えている作家に贈られることになっている。この意味では、ラビンドラナート・タゴールほど、この条件をみたしている作家はいない」と言った(K・クリバラーニ「タゴールの生涯」。またジュネーブ大学教授ジャン・エルベールに論文「愛の予言者タゴール」がある(昭33「アポロン」創刊号)。なお、ロマン・ローランは彼をVisionnaire(幻視者)と評している。

(注2) 作品「龍と詩人」のスールダッタは、老龍のいる洞窟の上にまどろんでいた時に、老龍のうたうのを聞き、それをわが詩として、試賦の会での勝利を得たのであった。そのことを自ら咎めて許しを乞いに訪れたのであるが、老龍は彼を諭して、「詩人アルタがもしそのときに瞑想すれば恐らく同じうたをうたったであらう。」と言う。又、「あのうたこそはわたしのうたでおまへのうたである。」とも、「われらがひとしく風でまた雲で水であるといふのに。」とも言う。つまり、アルタもスールダッタも等しく絶対者そのものと一体となり、その歌をそれぞれの歌とし得る詩人であるというのである。これは「梵我一如」の詩人における例であると考えられるが、タゴールにこの境地を述べた文がある。

昨夜、暗闇がたれこめた静寂のなかに、わたしはただひとり立って、永遠なメロディを歌っているものの声をきいた。そして眠りに就こうとするときに、自分が眠って無意識の

時にも「生命の舞踊は、星々に歩調をあわせて踊り」静まった肉体の舞踊場で「その踊りがつけられるのだらう。」という思いが心に浮んだ、というのである。(『生の実現』七)

なお、老龍チャーナタは罪を得て洞窟に封じ込められている存在で、「聖龍王」に許しを乞うている。私は先に老龍は絶対者を代弁する者と述べたが、「聖龍王」こそが絶対者そのものであり、老龍はその分身であると考えてもよいであらう。

八

最後になったが、「マリヴロンと少女」が「ニュー・ナシヨナルリーダー」^(註)第五巻にある教材の一課「マリヴロンと若い音楽家 (Malibran and the young Musician)」によつて発想せられたものであることは周知のことである。

その課における慈善行為でも有名な実在の名歌手マリヴランの慈善の対象であった少年を少女に変え、これに作者自身の思いを託したのが賢治の作品である。少年は自作の歌が、はからずもマリヴランによつて歌われることによって、貧困から脱することができたばかりでなく、著名な作曲家となる端緒を与えられたのであった。

「めくらぶだうと虹」がなぜ「マリヴロンと少女」に改作されたか、改作の意図は何であったかという点であるが、先ず両作品の相違はというと、前作品では虹が真理を語っただけで、どうすれば死の不安から脱せられるかについて

は語るところがなかった。改作では、「まことのひかり」の中で「正しく清く」働くことの貴さを述べ、舞台の上で名声を博することも、少女が音楽への憧れを抱いているにも拘わらず牧師の父とアフリカへ行くことを余儀なくされ、その地で恐らくは布教の手伝いをするであろうことも、その点では何ら違いがないことを教えている。このようにことを現実面に移した上で一つの答えを示している点で、前作からかなりの進展があるように思われる。「龍と詩人」の中で、言語表現と詩韻とは違っても絶対者の根源的なところから歌われた作品には優劣の差がない、と老龍が論じているのと、マリヴロンの教えとはその点で共通するものである。

また少女ギルダに作者自身の思いを託しているところは、タゴールに対する素直な崇敬の念の表出が見られると共に、感情の上で動揺の激しさが残る当時の作者の内面の一端が覗かれるように思うが、どうであろうか。

以上の二点に改作の理由を推測したのであるが、更に一点を加えるならば、「めくらぶだうと虹」には宗教色が濃く出すぎている上に、タゴールの影響が目立つという反省があつたのではないか、ということである。或いはこれが最大の理由だったのかも知れない。それにしても此の改作には、なお手入れの余地が残されている。草稿表紙に

「要三考！」と書かれているのは、そのことを示すものであろう。

(注) 明治・大正を通じて内容に変更なく行われた英語の教科書。賢治は中学生時代にこれで学んだ。花巻農学校でもこのリーダーを使っているが、その時の第五巻については不詳。

(一九九七・八・一八)